

8.16
2013. 2. 26

4

草書

草書の書法①筆づかい

楷書や行書の場合、筆づかいは決まった形の点画に整理して説明することができます。

しかし草書の字形は、いわゆる動態で、時に応じて変化します。だがよく観察してみると筆づかいは形のとりに共通する部分が見えてきます。最も標準的な書体である唐の孫過庭『書譜』から一つの目安を作りました。

一つ一つの点画については、起筆・収筆とその中間に分けてよく観察してください。

●横画 楷書と変わらないがさわやかな動感があり、起筆、収筆に連綿のための筆意がよくあらわれています。起・収筆の表情、中間のふくよかさを見てください。

●縦画 基本的には横画と同じ。起筆 きっぱりしたものー便

筆先が逆に入ったものー何

かするように入ったものー遺・申

収筆 軽くとめるものー便

ぬき出すものー申・信

つき返すものー余

左に払ったものー耳

●斜画(左右の払い) 線の表情をよく見るとその感じはいろいろです。特に上の少と人の

左払いの起筆の鋭さ、下の少と人のやわらかさ、反・及の線質や収筆は参考になります。

●縦から横へー右上への転折

ゆっくりと曲がるー今・東

打ちかえて曲がるー眞

厳しく折れ曲がるー性・巧

●横から縦へー左下への転折

●点 躍動感、角の鋭さ、量感に注意して一筆で書きます。書の最終画には隷書の形が残っています。

●戈法と右下への展開する文字 一般に文字は右上から左下に向かっての勢いが強いのですが、戈法やここに掲げた文字のように左上から右下に向けて展開するものもあります。

これは文字体勢の均衡を保つためと思われるます。

●右旋回 草書には右旋回の筆づかいが多く見られます。

右上の旋回 問・多など右上に旋回が出るも

のはやさしいようですが、筆の

表裏を意識せず、そのまま運んだほうが力がこもります。

左下の旋回 文字の左下に旋回が生じる文字

は筆がつかかかることが多いので、筆の軸を左上に起こし、力を抜くと回しやすくなります。

●左旋回 右肩に出る右旋回と同じ要領で、筆の力を少し抜くとらくに書けます。

●旋回から横画・点へ 筆の弾力と余韻を残してリズムカルに筆を運びます。

点

横から横へ

斜 画

縦 画

横 画

必

必

今

今

少

少

便

便

一

下

下

東

東

少

少

何

何

二

者

者

真

真

少

少

造

造

一

芒

芒

性

性

人

人

申

申

一

善

善

巧

巧

人

人

信

信

一

書

書

厥

厥

反

反

余

余

亅

資

資

厥

厥

及

及

耳

耳

耳

耳

任

任

匪

匪

草

草

問

問

越

越

坐

坐

規

規

揚

揚

多

多

藏

藏

並

並

兔

兔

時

時

内

内

威

威

右下への展開

立

立

蓋

蓋

研

研

因

因

之

之

相

相

絶

絶

年

年

尊

尊

從

從

會

會

運

運

峯

峯

明

明

吾

吾

老

老

通

通

殊

殊

敬

敬

然

然

草書の書法②二種の書きわけ

草書の字形

草書は動態であつて、同じ文字でも字形はさまざまに変化します。その動態の中で、なお均衡を保っています。草書の動きと、点画の組み合わせの特徴的なものを取り上げて説明してみます。

(一) 動きの出し方—中心を移動する

楷書・行書でも中心の縦画はやや右に寄っています。草書の場合、その右寄りの度合が大胆になります。左の「木」の場合、横画の右端を通っています。右側に重心が寄ると文字は斜めに構えたような姿勢になります。楷書を直立不動とすれば、草書は半身の構えとなります。文字の中心となる縦画や点画の交

差する中心部が右に寄ると、必然的に左側に大きな空間が生じます。この空間を生かして左側の点画がのびのびと書かれます。これが草書の一般的な形です。中心から左はのびやかに、中心から右はつましく点画が配置されているのがわかると思えます。

横画や左払いが左へ大きく出ているので不安定な姿勢になるかという点、それも救われています。最終画の右払いが水平に近く書かれ、動きの中の安定に寄与しています。

(二) 点画の組み立て

草書の形を支えるものの一つに点画の明快な交差があります。表の中の例のように、直角に近く交差する線は、文字の明快さを生み、構造的な確かさを感じさせています。

(三) 変化のつけ方

草書はそのままでも変化に富んだものですが変化のつけ方を整理すると、次のようになります。

線質の違いで変化をつける

● 字形で変化をつける

● 文字の大小で変化をつける

● 点画の肥瘦で変化をつける

● 線質の違いで変化をつける

● 古典や手本をこうした目でも見てください。

(四) 筆勢の出し方

横画から縦画、縦画から横画へと進むとき、筆を打ちかえると、鋭い稜角が出て筆の勢いが得られます。

節筆は紙の折りに筆があたって生まれる線のおもしろさですが、筆勢を持続するための技巧でもあります。

草書の書法③崩し方のきまり

草書は少しづつ正確に覚える

草書は、実用的な便利さを追求するあまり、簡略化が進み過ぎ、却って紛らわしくなり、「草書を書くに暇あらず」とまでいわれるようになりました。慎重に書かないと誤るおそれがあるということです。現在では、草書は実用的な書体ではありませんから、特に努力

して暗記することはありませんが、機会のあるときに、一字ずつ正確に覚えるようにするのがよいでしょう。そして、ある程度文字を覚えたら、共通したもの。似て非なるもの、楷・行とは全く字形の違う特殊な形のものというように整理してみるとよいでしょう。これについては146ページ以下の一覧表を参考にしてください。一応の法則を覚えておくこと便

利でしょう。

古人も草書を覚えるには、中国でも日本でも相当に苦心したらしく「草訣百韻歌」というものがあります。もとは主義之の書を集めたとか、米芾が作ったとかいわれますが、草書を覚えるための成句集です。

草書の書風

草書の書きぶりについても、いろいろの作品を比較し、その相違や良さを感じとるようにつとめたいものです。鑑賞眼を養い、表現力を高めることになるでしょう。

宋・米芾の「草聖帖」と唐・孫過庭の「書譜」を見て、それぞれの線質を味わってください。

米芾の書は、孫過庭の書に比して線質が豊満で、右下に重みがかけられた字形が多いのが特徴です。「草聖帖」は、唐代に草聖と謳われた張旭と懷素の草書について論じたものです。

有點方為水 空挑却是言

有點方為水、レ空挑却是言

步觀牛引足 羞見羊踏田

步觀牛引足之羞見羊踏田

長短分知去 微茫視每安

長短分知去、去微茫視每安

草訣百韻歌

有點方為水

空挑却是言

(点のあるのはサイズ、なければ言へん)

步觀牛引足

羞見羊踏田

(「步」の字は牛が足を引き、差は羊が田を踏んだ形)

長短分知去

微茫視每安

(「知」「去」の字は長短で、「每」「安」の差はわずか)

知 人
而 者
不 得
同 老

和而不同

人書得老